

JACET 関西支部 2004 年度春季大会
ワークショップ・研究発表・実践報告・講演概要集

ワークショップ（第1室）

21世紀の学習英文法を考える：語用論、認知言語学、実証的語法研究からの提言
(関西支部学習英文法研究会企画)

コーディネータ：神崎高明（関西学院大学）

パネリスト： 山本英一（関西大学）

「学習英文法と語用論：ポライトネスを中心に」

大森文子（大阪大学）

「概念メタファーと発信型英語教育」

八木克正（関西学院大学）

「21世紀にふさわしい学習英文法の内容を考える」

近年の英語学・言語学研究の進展に従い、英文法に関して新たに多くの知見が得られつつある。それらの最新の研究成果をどのように学習者レベルの文法指導やコミュニケーション能力の養成に生かしていくかを考察するのが今回のワークショップの中心テーマである。

英文法の一つの単位として文が存在するが、文の意味はコンテクストによって異なってくる。文とそのコンテクストの関係を研究するグライス以降の語用論的研究の成果を学習英文法の中に組み入れることによって、英語コミュニケーションのための学習英文法の構築が可能になってくる。

世界を長らく席巻した生成文法理論の英語教育に対するインパクトはそれほど大きなものではなかったかもしれないが、認知言語学の台頭によって、言語理論と英語教育は再び強く結びつく可能性がでてきた。認知言語学の枠組みの中で概念メタファーなどの研究が急速に進み、従来の生成文法には見られなかった言語理論の英語教育への応用が期待できる。

また、我が国の英語教育の中で脈々と受け継がれてきた、古すぎる、あるいは誤った教育内容を見直す必要がある。古い英語表現や語法・文法を排除し、教育内容を今使われている英語をもとにした内容に改めていかねばならない。実証的な英語研究のツールとして開発されてきた大規模な英語コーパスや、さまざまな言語調査の方法を利用して、20世紀前半までに廃れたような英語表現に基づく教育内容を廃し、21世紀の今にふさわしい英語教育の内容に改めてゆくことが可能になってきた。その実践も盛んに行われている。そのような意味で、我が国の英文法研究に革命が起こりつつあると言える。現在の学習英文法の内容の何が問題であって、どう改めていかねばならないかを、具体的な例をあげて論じる。

今回のワークショップでは、まず山本が語用論の観点から、コミュニケーションに資する英文法に欠かすことのできない場面・文脈といった要素に注目し、特にポライトネスの問題、あるいは談話の流れも視野に入れながら、学習参考書の文法指導が孕む問題点を考察する。次に大森が、認知言語学における概念メタファーの英作文教育に対する応用を、認知言語学・語用論・コーパス言語学などの最近の成果を取り入れて編纂された英英辞典を教材に用いた実際の授業例を取り上げながら考察する。最後に、八木が実証的語法研究の立場から学習英文法の問題点について論ずる。パネリストの発表の後、フロアーの先生方との意見交換を通して、今後の学習英文法のあり方を考えていきたい。

ワークショップ（第2室）

Developing a Language Portfolio for Japan

(Proposal presented by the Research Group on Foreign Language Education Abroad)

Coordinator & Panelist: Fouser, Robert J. (Kyoto University)

Panelists: Matsuura, Kyoko (Kyoto Seian High School)

Nishio, Yuriko (Otani University)

Takehisa, Fumiyo (Nara University)

This workshop will focus on developing a language portfolio for the Japanese context. Language portfolios were first developed by the Council of Europe's Modern Languages Division in the 1998-2000 to assist learners in assessing and documenting their foreign language proficiency. The European Language Portfolio (ELP) was launched throughout Europe in 2001, the European Year of Languages. The ELP consists of three parts: 1) a language passport, which contains information about the learner's language learning achievement, intercultural experience, and a self-assessment of his or her own language proficiency according to the Council of Europe's Common Reference Levels; 2) a language biography, which summarizes learner goals and contains records of language learning and intercultural experiences; 3) a dossier of samples of the learner's work and evidence (grades, test scores, evaluations, etc.) of his or her achievements in language learning. The Council of Europe's Education Committee offers validation to models of language portfolios to ensure that they conform to the ELP standards. Learners and institutions may use language portfolios as the sole measure of assessment or as a supplementary measure in combination with other measures. Outside of Europe, language portfolios have come into common use in Hong Kong and are being used on a small scale in South Korea.

By examining samples of portfolios from Europe and other countries, the workshop will offer a hands-on opportunity to learn about language portfolios. The workshop will begin with a short introduction to language portfolios (Robert J. Fouser). This will be followed by an introduction to language portfolios that are in use at various levels of the educational system in England (Yuriko Nishio), France (Kyoko Matsuura), and Hong Kong (Fumiyo Takehisa). The last half of the workshop will consist of small-group discussions to review a proposed pilot version of a language portfolio for Japanese learners. The workshop will conclude with an overall group discussion and a question and answer session. The organizers of the workshop hope to make a pilot version of portfolio with the tentative title "Japan Language Portfolio" (JLP) available for review and pilot use on the Web.

References

Council of Europe, 2000: *European Language Portfolio (ELP): Principles and Guidelines*.

Strasbourg: Council of Europe. (Document DGIV/EDU/LANG (2000) 33)

Little, D. 1999. *The European Language Portfolio and self-assessment*. Strasbourg: Council of Europe, Document DECS/EDU/LANG(99) 30.

Schärer, R., 2001: *A European Language Portfolio – Final Report on the Pilot Project (1998 – 2000)*. Strasbourg: Council of Europe.

発表（第1室）

<研究発表> 「ニーズ分析の副次的効果 教師と学習者のコミュニケーションの観点から」
岩井千春（大阪大学大学院生）

ESP (English for Specific Purposes)においてニーズ分析はコースデザインの基礎となる重要な手順であり、その研究が活発に行われてきた。しかし、それらのほとんどは教師の視点でニーズ分析の方法論やある特定の分野のニーズの実態、またはニーズ分析の教育への応用を研究しているものであり、学習者自身がニーズ分析に対してどのように感じているのかについての研究は希少である。

そこで、本研究の目的は、ESP 授業におけるニーズ分析についての学習者の意見を分析することにより、学習者にとってどのような意義があったのか、また、どのような問題があったのかを明らかにし、ESP 教育のニーズ分析への示唆を導き出すことである。調査対象は、発表者が非常勤職員として ESP 的アプローチによる英語授業を実施した、ある大学の管理栄養士養成課程の二年次生(5 クラス 229 名)である。授業アンケートに対する感想を聞いたところ、5 択の選択肢の中で、「とても良かった」又は、「良かった」と答えた学習者が 70.8% (148 名)、「どちらとも言えない」は 26.8% (56 名)、「あまり良くなかった」は 2.4% (5 名)であり、「全く良くなかった」は一人も選択しなかった。これらの結果から、ニーズ分析が概ね歓迎されていたということが考えられる。更に、各選択肢を選んだ理由の質的データからは、教師と学習者とのコミュニケーションが成立していたこと、人間関係構築の役割を果たしたことが、ニーズ分析の副次的効果として明らかとなった。

本研究の調査結果も示唆するように、ニーズ分析は ESP の教育内容を考える上で重要なツールであるだけでなく、有効な点も多い。しかし、一方で、学習者や教師の負担の問題も大きい為、ニーズ分析の手法にも更なる工夫が必要であると考える。

<実践報告> 「実践報告：集団学習から個人学習へ」

東郷多津（京都ノートルダム女子大学）

語学能力は個人格差があり、習得に関する意欲も個人差がある。集団クラスにおいて個人の能力を伸ばす工夫を凝らすことはある程度可能であるが、本当に学生一人一人が「国際語」としての英語を身に付けるためには、学習者が自ら目標を定め、それに向かう個人学習の確立が必須である。しかし、一人の授業者が複数の個人の能力とニーズに応じた学習教材を提供することには限界がある。個人学習と言えば、これまでの事例では Web や PC 本体で成績や学習推移が管理できる自己学習ソフトを自らのペースで進める方法が紹介されてきた。しかし、それも一斉に同じ教材を使うという意味において、眞の個人学習とは異なる。学生を本当の意味で個人学習に導くためには、授業者が特別な教材を用意することなく、学生自身が主導権を持ってその必要と好みに応じて学習するという方法の確立が望まれる。本発表においては、特別プログラムに自動的に応募してきた学習者の事例を報告し、個人学習への移行についての問題点や注意点を検討する。

個人学習の手順は以下の通りである。まず、後期の授業に際して、2 年次生で TOEFL450 点前後、1 年次生は 400 点前後の学生を対象に特別プログラムへの参加者を募集した。応募者には後期の授業が始まるまでに教材と毎回の授業計画と最終目標を立てるよう指示する。授業者の許可を得た後、学習者は基本的にクラスに顔を出さず毎回別室に直行して各自が学習を行う。授業者は毎回出欠のみ確認する。学習者は 45 分の授業時間終ると自分で学習を終了する。個人学習開始 1 ヶ月後、計画の見直しが必要かどうかを確認する。冬休み前に一度面接を行い、最終授業の前週に最終課題を学習者と話し合って確認する。

今回応募した学習者(2 年次生 3 名)は全員特別プログラムを終了した。かれらの満足度はかなり高く、個人学習への可能性を見いだせる。今後はこれをどうプログラム化して、学習目標のない学生にも適用できるかが今後の課題である。

<Report on Classroom Activities> "A Report: As an ESL Class Assistant for Primary Students at the Japanese School of Melbourne"

Waki, Yoriko (Heian Jogakuin (St. Agnes') Junior & Senior High School)

【目的】 小学校の英語教育に関して、文部科学省は教科としてではなく、あくまでも英語に慣れさせることに主眼を置いているが、保護者の方は、将来子供の役に立つように教科の面を重視しているのが現状である。このように英語教育に対しては、一般の人が求めるものと、それに携わる教員が目指すものは同じではない。小学校教員は大学で養成されるので、大学での英語教育をきちんと見直していく必要がある。本発表は、筆者が2002年2月より開始したオーストラリア大学院留学中、日本帰国直前までの約5ヶ月間、日本人学校 ESL クラスアシスタントとして採用され、週3日間、小学3～6年生の授業を補佐していた時の経験をまとめたものである。この授業では、英語は Second Language (実際使用できる言語)として扱われており、一般人と教員とがそれぞれ求める、小学校での英語教育のあり方に何らかの示唆を与えるものと思われる。

【背景】 メルボルン日本人学校では、英語教育の充実に向け、小学部1年から ESL 授業、小学部5・6年では中学部と同様に英語の授業を実施している。その独自のカリキュラムの内訳は、低学年：週4時間、中学年：週5時間、高学年：週4時間 + 英語クラス週2時間。ESL の授業は2人のオーストラリア人教師（常勤）により担当されている。現地の日系企業駐在員および客員研究員等の御子息が通うため、在豪歴の違いによる ESL 授業への順応度の差が著しく、そのためボランティアによる授業アシスタントの協力が欠かせない。留学生など英語のできる在留邦人を複数名募り、各時間1人配置させている。

【結論】 入学当初、児童は英語での指示が理解できなくても周囲の様子をうかがいながら次第についていくようになる。あくまでも「英語の世界になじむ」ことが大切にされており、英語圏の中でもオーストラリア特有の文化事情に接することを意識した授業構成は、この学校独自のものである。地元文化を理解し、英語で発信する態度を養う点において、日本国内でも応用がきくのではないだろうか。

【参考文献】

海外子女教育振興財団 (2003) 『月刊 海外子女教育』7月号 pp. 36-37

URL: www.joes.or.jp/g-kaigai/zaigai/2003.07-2/n3423.html

JACET 創立40周年記念誌出版委員会 (2002) 「JACET 創立40周年記念誌座談会」 pp. 72-86

メルボルン日本人学校 ホームページ URL: www.jsm.vic.edu.au

和氣依子 (2003) 「在外日本人学校・小学部における ESL 授業」『第一回滋賀大学教育研究フォーラム要旨集』 p. 5

発表（第2室）

<Research Paper> "Word Level Analysis of TOEIC by Using a Small TOEIC Corpus"

Mizumoto, Atsushi (Graduate Student, Ritsumeikan University)

In recent years, more and more English learners, especially university students, are taking TOEIC (Test of English for International Communication) since a lot of companies use it as a yardstick for their prospective employees' English proficiency. With this trend, the number of universities, which have established special or extracurricular TOEFL test preparation courses, has been on the rise. From this perspective, learning English for most university students inevitably means preparing for TOEIC as well. The purpose of this study will be to reveal the level of difficulty of the vocabulary within the TOEIC reading section and point out some characteristics of the TOEIC vocabulary in order for professional instructors to know how and what to teach in those preparation courses. First, a small TOEIC corpus consisting of a total token of 108,945 words was created by accumulating sets of TOEIC tests previously administered in the past and available to the public. Other commercially available TOEIC preparation textbooks were also included only if the sentences met the criterion for this corpus.

(for example, in Part 5 and 6, declarative sentences are mandatory, must not start with pronouns, nor start with a first name, etc). Then, the word list from the corpus was analyzed, lemmatized, and compared with two accepted and proven word lists; one is JACET8000 and the other is ALC SVL 12000. Consequently, it was revealed that JACET8000 covers approximately 80 percent of the whole word list. After analyzing the word list, it also became clear that it was necessary to further examine each sentence to actually see the difficulty of standard TOEIC sentences. This was required, as the word list alone did not provide sufficient information on the level of difficulty of vocabulary used at a sentence level. The findings suggested that the vocabulary used within the sentences were virtually the same difficulty as other non-TOEIC sentences, but that higher vocabulary level words tended to appear more often in the TOEIC test. Therefore, it is proposed that special care be taken when teaching the TOEIC vocabulary as it consists of words at the higher end of the spectrum of difficulty.

<Research Paper> "Compliments in Television Interviews"

Nishizawa, Midori (Canadian Academy)

Televised interviews may be a source of naturally occurring data for a range of corpus linguistic analyses. The purpose of this study is to assess the validity of TV interview broadcasts as an authentic representation of actual language use. Although some researchers have looked at isolated lexical collocations or grammatical patterns, none so far have looked at speech acts. Also, it is unknown how such a corpus compares with other collections of natural data.

The study by Rose (2001) is likely the first attempt to assess the validity of using American films as an authentic representation of actual language use. He collected compliments and compliment responses in American films and then compared his data with naturally occurring data (Manes & Wolfson, 1981, Miles, 1994). Tatsuki & Kite (forthcoming) replicated Rose's study. The results of their study supported Rose's findings that film data correspond quite closely with naturally occurring speech data in terms of syntactic formula, compliment topic and compliment response strategy. However, gender distribution, adjective choice and compliment response strategy appeared to diverge from the naturally occurring speech data cited in pragmatics research.

This study uses a similar methodology to that of Rose (2001) and Tatsuki & Kite (forthcoming) in order to allow for cross comparisons of film data and the naturally occurring data of Manes & Wolfson (1981) and Miles (1994). Compliments and compliment responses were collected from 40 live television interviews, Larry King Live (LKL) on CNN. The shows were selected to ensure an equal number of male and female guests, 50 each. Data comprised of compliments made by guests and callers were compared with the film data of Rose and Tatsuki & Kite, as well as with the naturally occurring data of Manes & Wolfson (1981) and Miles (1994). The areas of comparison are 1) syntactic categories using ten syntactic codes, 2) gender distribution, 3) compliment topic: appearance, possession, ability/character, and specific act, 4) compliment response strategy using eight categories: acceptance, agreement, disagreement, self-praise avoidance, return compliment, comment history, answer question, and others, and 5) adjective choice.

Although preliminary results indicate strong syntactic similarities with both film and natural occurring data, the gender results are less clear-cut. Discussion of results will include cautionary guidelines for teachers who plan to use live TV interviews/transcripts as samples of authentic discourse.

References:

- Manes, J. & Wolfson, N. (1981). The compliment formula. In F. Coulmas (ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp. 115-132). New York: Moulton de Gruyter.
- Miles, P. (1994). Compliments and gender. *University of Hawaii occasional papers series 26* (pp. 85-137).

<Research Paper> "Differences in First and Second Language Acquisition"

Bradford-Watts, Kim (Osaka Gakuin University)

Research into how people learn languages has grown exponentially in recent years. Although insights into how first languages are learned can, to an extent, inform some areas of practice, it is necessary to understand how second language learners differ in their learning in order to maximize the learning opportunities of our students. In approaching this question, three factors need to be considered. The first is the theoretical, the second is language learning itself, and the third is the language learner. Based on the literature review of the issues identified above, the implications for teaching and learning of second language learners will be addressed. This is especially important for EFL teachers who need to isolate the most salient factors influencing acquisition in situations offering only limited contact with L2 resources and culture.

In light of the differences discussed in this paper, the presenter concludes the basic implication of these differences for teachers is that, of the theoretical approaches available for understanding processes of language acquisition, the two most helpful appear at this time to be social constructivist and cognitive approaches. They are accessible enough for individual teachers to be able to understand, and to undertake research using their own students in order to tailor the learning experience more directly for the student. Such action research will point the way for the teacher in such aspects of their professional development as new research questions, revised classroom practice, and more appropriate materials selection and development. When deciding materials or activities, teachers need to be aware of the type of specifically cultural information students possess and that they would need to communicate to someone from/in a different culture.

Extensive references include:

- Asher and Garcia. (1969). The Optimal Age to Learn a Foreign Language. *Modern Language Journal*. 53 (5), 334-341.
- Brown, H. D. (1987). *Principles of language, learning and teaching* (2nd Edition). (pp15-37), Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- de Villiers, J & de Villiers, P. (1978). *Language Acquisition*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Ellis, R. (1995). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Epstein, S.D., Flynn, S., & Martohardjono, G. (1996). Second language acquisition: Theoretical and experimental issues in contemporary research. *Behavioral and Brain Sciences* 19 (4): 677-758.
- Hurford, J. 1991. The evolution of the critical period for language acquisition. *Cognition*, 40, 159 - 201.
- Krashen, S., Scarcella, R., and Long, M (eds). (1982). *Child-Adult Differences in Second Language Acquisition*. Rowley, Massachusetts: Newbury House Publishers, Inc.

発表（第3室）

<研究発表> 「英和辞書における見出し語のレベル表示」

東野ツヤ子（関西学院大学大学院生）

現在日本で出版されている学習英和辞典における見出し語は、使用者にとって重要であるという観点からレベル表示がされている。このレベル表示の段階や各レベルにおける見出し語数は辞書によって大きく異なる。近年出版された『レクシス英和辞典』は見出し語のレベル表示区分の基準としてセンター試験問題や英検問題での必修語という新しい視点を取り入れている。しかし、センター試験レベルに含まれる語は約 6000 語となっており、この語数の多さに疑問を抱いた。そこで、次の 3 点を問題点としてみた。

- (1) センター試験に必要な語彙数、レベルはどれくらいか。
- (2) 『レクシス』の見出し語のレベル表示はセンター試験問題と一致しているか。
- (3) 英和辞典における見出し語のレベル表示は適切か。

10 年間分のセンター試験の語彙を『レクシス』のレベルと比較して、レベル表示がどの

程度一致しているのかを調べてみた。その結果、『レクシス』のレベル表示はセンター試験とは完全に一致しておらず、センターレベル以上の語が約 11%含まれていた。また、センター試験 10 年分と高等学校英語教科書 16 冊を比較して、センター試験のみに出題されていた語を『レクシス』のレベルごとに分け、各レベルから数語を選び出し、それらの語のレベル表示を他の英和辞書でも調べてみた。その結果、『レクシス』のセンターレベルの語群から辞書ごとにレベル表示のぐらつきが見えることがわかった。

これらの結果から、『レクシス』におけるセンター試験のレベル表示は実際の試験とは一致していないので、英和辞書の見出し語のレベル表示はあくまで参考にした方が良いと考える。また、英和辞書の見出し語のレベル表示には、-ly で終わる副詞のように見出し語としての扱いが十分でない語もあり、更に改善の余地があると考える。

【参考文献】

- 荒木一雄. 1974. 「基本語」『英語の語彙』現代英語教育講座第 5 卷、第 6 版 (pp. 3-23) 東京 : 研究社
Béjoint, H. 2000. *Modern Lexicography: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press
Biber, D., Conrad, S., Reppen, R. 1998. *CORPUS LINGUISTICS*. Cambridge: Cambridge University Press
教学社出版センター(編) 2003. 『2004 年版大学入試センター過去問研究 英語』京都 : 教学社

<贊助会員発表> 「電子辞書商品の技術開発推移と最新情報 機能・コンテンツ」

八木慎一（カシオ計算機株式会社）

国内の電子辞書市場は、数年前迄は見出し語の主要な語彙のみ収録したスタンダードタイプの電子辞書が市場を牽引していたが、ここ数年は語彙のみならず例文情報等を収録した本格派タイプの電子辞書が急速に拡大してきています。ユーザー層の拡大、認知の浸透が進み本格派タイプの市場規模は 2003 年度 170 万台を超える市場規模（弊社推定）までに成長してきました。

製品も年々進化しており、搭載コンテンツは大型辞書化・第 2 外国語（独・仏・中）への展開が上げられ、音声機能は単語発音から例文発音と進化しています。製品を支えるハードウェア要素技術では携帯性を追求する薄型化・堅牢性・電池の長寿命化を行いやすい電子辞書を目指し開発してきました。

今回の発表ではコンテンツ展開・ハード技術・音声技術に絞り、現在までの技術進化と今後の取り組むべき技術動向について 2004 年最新モデルをベースに発表・ご紹介をさせて頂きます。

<贊助会員発表> 「電子辞書上の Bank of English コーパス

ワークショップ 実際に触りながらその活用法について考える」

中村美和（セイコーインスツルメンツ株式会社）

“The Bank of English”から抽出された 500 万語にのぼるコーパス（5-million-word Wordbank）入りの電子辞書 SR-T6700（予定）を実際に使っていただきながら、その活用方法等について意見交換を行うワークショップです。簡単な操作説明の後、事前に数名の大学や高校の先生方にお使いいただいた活用レポートを報告させていただきます。参加者の皆様にも実際にポータブルな電子辞書上で動くコーパスを体験していただいて、活用方法などについてご意見交換の場もご用意しております。尚、お使いいただいたご興味をもつていただいた参加者の方々には、ご希望に応じてモニターとしてお貸し出しする予定です。多くの方のご参加をお待ちしております。（尚、当日の実機は先着 30 名様分を用意させていただく予定です）。

講演

「'Construal' と 'Fashions of speaking' <英語らしさ>、<日本語らしさ>ということをめぐって」

池上 嘉彦（昭和女子大学大学院教授・東京大学名誉教授）

題名の中の 'Construal' は認知言語学の基本概念の一つで、ある事態を言語で表現することに先立って発話者が行なうと想定される事態の認知的な把握、あるいは、言語化のための意味づけ('thinking for speaking')：何を表現し、何を表現しないか、何を焦点化し、何を背景化するか、などに関しての選択)の仕方のこと。 'fashions of speaking' は言語的相対論で知られる Whorf のあまり注目されていない概念で、その言語の話し手が特に好んで選ぶ表現の仕方ということ。

英語を日本語、日本語を英語に移すといった場合に特に顕在化するこの種の問題を、特に<英語らしさ>、<日本語らしさ>ということとの関連で考えてみたいと思います。

講師紹介[池上嘉彦氏]：昭和女子大学大学院教授・東京大学名誉教授。日本認知言語学会会長。日本英語学会評議員。日本記号学会理事。英語教育協議会評議員。Advisory Board Member: *Code: An International Journal of Semiotics* (Amsterdam), *Text* (Amsterdam), *Functions of Language* (Amsterdam), *Japanese Discourse* (New Brunswick), *Discourse Studies* (London), *English Language and Linguistics* (Cambridge) など。

1934年京都市に生まれる。1956年東京大学文学部英吉利文学科卒業、1961年東京大学大学院英語英文学博士課程修了、1969年イエール大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。1961年津田塾大学専任講師、1985年東京大学教授を経て現在に至る。客員教授：ミュンヘン大学、82年夏学期；インディアナ大学、85年夏期講座；ベルリン自由大学、97年4月~98年3月。客員研究員：フンボルト財団、74年秋~76年春、94年夏、95年夏；ロングマン社、86年秋~87年秋；フルブライト財団、90年夏；ブリティッシュ・カウンシル、91年春。

主な著書に『英詩の文法』(1967)(研究社)、『意味論』(1975)(大修館書店)、『意味の世界』(1978)(日本放送出版協会)、『「する」と「なる」の言語学』(1981)(大修館書店)、『ことばの詩学』(1982)(岩波書店)、『詩学と文化記号論』(1983、筑摩書房；1992、講談社学術文庫)、『記号論への招待』(1984)(岩波書店)、『ことばのふしげ・ふしげなことば』(1987)(筑摩書房)、『<英文法>を考える』(1991)(筑摩書房)、*The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture* (ed., 1991) (Amsterdam: John Benjamins)、『英語 VI : 英語の意味』(1999)(日本放送出版協会)、『日本語論への招待』(2000)(講談社)、『自然と文化の記号論』(2002)(日本放送出版協会)がある。他に訳書、学術論文多数。専門は言語学(記号論、意味論)であるが、言語の意味や構造の理論的研究のみでなく、その理論や方法論を、文学(詩)や物語のテクストや日常の言語の意味の問題に応用して論じる他、一般や小中学生向きに言語(記号)についての解説書を出版している。また、言語と文化の関係についても記号論的アプローチから分析し、日本文化を記号論的に解説する他、日本語の特徴を機能的観点から考察する。最近は認知言語学の観点から、人間の認知的営みの特徴や学校英文法の再編の可能性も論じているほか、Pearson-Longman 社関係の learners' dictionaries の編集にも関係している。